

## Paul KLEE



アーティゾン美術館蔵書展示

INFO ROOM

## 書籍案内

本展でご案内した4点の邦訳は下記書籍で読むことができます。

## 1. 創造の信条告白

パウル・クレー「線描芸術について—創造的信条告白」岸野悦子訳、  
『表現主義の美術・音楽』（ドイツ表現主義4）河出書房新社、1971年、  
169-173頁

\*本冊子では「創造的信条告白」というタイトル和訳を採用しました。

\*初稿の和訳は下記書籍に収録されています。

フェリックス・クレー『パウル・クレー 遺稿、未発表書簡、写真の資料に  
よる画家の生涯と作品』（新装版）矢内原伊作・土肥美夫訳、みすず書房、  
2008年、151-157頁

## 2. カンディードあるいは最善説

ヴォルテール『カンディード』齊藤悦則訳、光文社、2015年

## 3. 教育スケッチブック

パウル・クレー『教育スケッチブック』（新装版 パウハウス叢書2）利光功訳、  
中央公論美術出版、2019年

## 4. 現代芸術について

「現代芸術について」『ポール・クレー 造形芸術論 作品と生涯』勝見勝訳、  
三笠書房、1957年、101-122頁

フェリックス・クレー、前掲書、163-178頁

本冊子のテキスト作成にあたり上記を参照しました。

また本冊子で言及したクレーの日記の和訳は下記書籍から引用しました。

ヴォルフガング・ケルステン編『クレーの日記』高橋文子訳、みすず書房、2018年

アーティゾン美術館蔵書展示

パウル・クレーと書物

会期：2020年6月23日（火）—10月25日（日）

会場：アーティゾン美術館 4階 インフォールム

編集・執筆：黒澤美子

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館

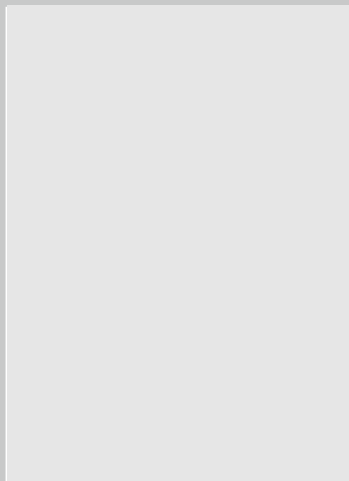
〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

www.artizon.museum

©2020 Artizon Museum, Ishibashi Foundation

## パウル・クレーと書物

アーティゾン美術館は、所蔵品にかかわる図書資料の収集を続けており、4階インフォールムで所蔵図書の一例をご紹介します。今回は、4階の展示室で開催されている特集コーナー展示「新収蔵作品特別展示：パウル・クレー」に関連する書籍をご紹介します。



パウル・クレーと猫のフリビユ、  
ボッセンホーフェンにて  
1921年

撮影者：フェリックス・クレー

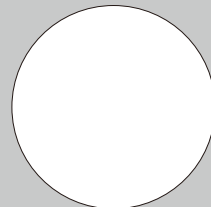
Zentrum Paul Klee, Bern, Klee Family Donation  
© Klee-Nachlassverwaltung, Hinterkappelen



パウル・クレー（1879-1940）は20世紀前半を代表するスイス出身の画家です。さまざまな技法に取り組み独自の作風を探究したクレーは、自らの芸術理念や創作理論を言語化することにも積極的でした。研究ノート、論文、講義の記録、日記などの残された資料から、彼の豊かな著述活動を窺い知ることができます。新収蔵作品にも明らかのように、線描はクレーの造形にとって非常に大切な要素でした。ここでは画家としての存在感を高めていく1910年代に執筆された線描芸術についての論考や、その線描論の特徴を挿絵に見てとれる小説、そして1920年代の講義や講演に基づく書籍を紹介します。

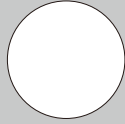


パウル・クレー 《数学的なビジョン》  
1923年  
油彩、水彩・紙（厚紙に貼付）  
52.0×32.5cm  
石橋財団アーティゾン美術館蔵



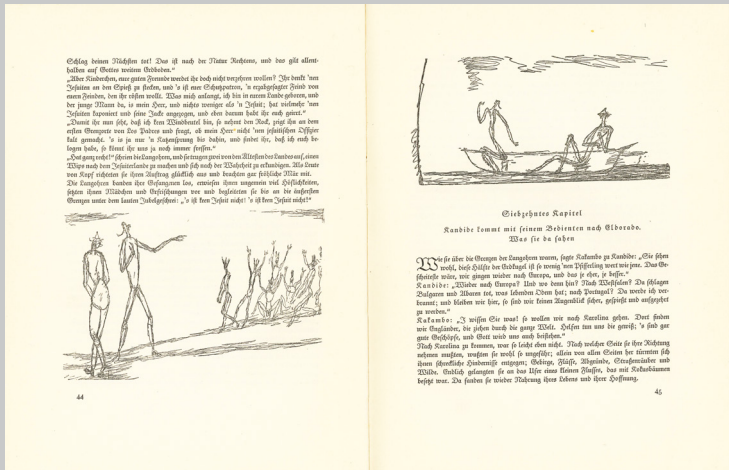


1. カージミル・エートシュミット編『創造の信条告白』（芸術と時代の演進 8）ベルリン、エーリッヒ・ライス社、1920年  
Ed. Edschmid, Kasimir. Schöpferische Konfession. (Tribüne der Kunst und Zeit, XIII) Berlin, Erich Reiss, 1920  
石橋財団アーティゾン美術館蔵



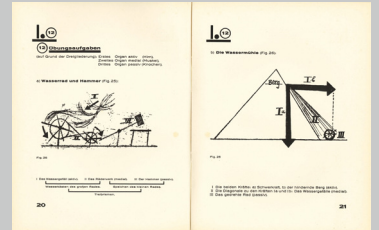
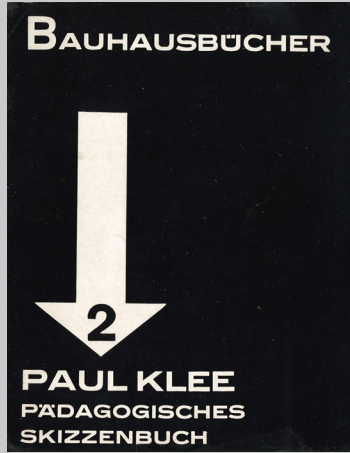
本書はドイツの作家カージミル・エートシュミット編集の雑誌で、この巻には「創造の信条告白」をテーマに芸術家たちの様々な論考が集められています。クレーの他には「青騎士」の中心メンバーであったフランツ・マルク(1880-1916)やドイツ表現主義の画家マックス・ベックマン(1884-1950)などが文章を寄せています。クレーは1918年に本書への寄稿を依頼され、線描芸術についての論文を執筆しました。クレーの言葉のなかでも有名な「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにするのである」という一節は、本稿の冒頭文です。

クレーの絵画はその色彩の豊かさから「色」に注目されがちですが、作家自身は「線」による表現を大変熱心に研究していました。クレーにとって線とは「運動」の産物であり、本書で線描芸術の要素を「エネルギー」であると述べています。点が運動して線となり、線が面に、面が空間へ変化する。それには時間が必要となることから「造形活動の場は時間」であるとも説いています。作品がそうして一部分ずつ出来上がる様子を「一軒の家」が組み立てられるようだと言え、比喩を用いた語り口も特徴的です。



2. ヴォルテール著、パウル・クレー挿絵『カンディードあるいは最善説』ミュンヘン、クルト・ヴォルフ社、1920年  
Voltaire, Illustration by Paul Klee. Candide, oder die beste Welt. München, Kurt Wolff, 1920  
石橋財団アーティゾン美術館蔵

小説『カンディード あるいは最善説』は、故郷を追われることとなったカンディードという若者が、戦乱、震災、盗賊の襲撃といった災難や不幸に見舞われながらも旅を続け、この世で起こることすべては最善なのだという最善説について、彼なりの答えを見だしていく物語です。18世紀フランスの思想家ヴォルテール(1694-1778)の作品で、1759年に出版されました。クレーはこの物語に惚れ込み、1906年1月の日記に「感嘆符三つ」と熱のこもった感想を書き残しています。そして自らの希望で1911年から1912年にかけて挿絵の制作に取りかかり、その感動をほとぼしするような激しい線に昇華させました。そこには彼が後に『創造の信条告白』において綴った、エネルギーの転化としての線描芸術につながる要素を認めることができるでしょう。



3. パウル・クレー『教育スケッチブック』（ Bauhaus叢書 2）ミュンヘン、アルベルト・ランゲン社、1925年  
Klee, Paul. Pädagogisches Skizzenbuch. (Bauhausbücher, 2). München, Albert Langen, 1925  
石橋財団アーティゾン美術館蔵

1921年、クレーはドイツのヴァイマルに設立された国立造形学校 Bauhaus において造形理論や色彩理論について教をはじめ、自身の研究も深めていきました。本書は Bauhaus でおこなわれた 1921年度と 22年度の形態論の講義から一部を抜き出し、挿図も新たにして編集したものです。ここでは線描についての思索から始まり、物体の運動や、エネルギーの作用によって、どのように形が生まれ成長していくかという論が展開されています。有機的に変化していく形に対しての作家の深い観察眼と学究心を見てとることができる一冊です。挿図には物理学や数学の教科書のように、たくさんの矢印や記号が用いられています。クレーは絵画作品にも度々矢印や記号のモチーフを描き込んでおり、 Bauhaus 時代に描かれた当館所蔵の《数学的なビジョン》(4階特集コーナー展示「新収蔵作品特別展示：パウル・クレー」出品 no.6)もその一例です。



4. パウル・クレー『現代芸術について』ヘルン、ベンテリ社、1945年  
Klee, Paul. Über die moderne Kunst. Bern, Bentele, 1945  
石橋財団アーティゾン美術館蔵

本書は 1945年に刊行されていますが、1924年にヴァイマルの隣町イエナの芸術協会で、一般向けに行われた講演会の内容が単行本化されたものです。同時期に編纂された 3の『教育スケッチブック』が造形学校の学生に向けられているのに対し、こちらは必ずしも芸術を専門としているわけではない民衆に向けて語られたという点で性質が異なります。この講演でクレーは、「自然や人生の事象」を樹木の「根」に、その根から流れてきた「樹液の流れ」に動かされて制作する芸術家を「幹」に、そうして出来上がった作品を「梢」になぞらえています。そして根と梢が同じ形になることがないように、描かれるものと描きあげられた作品の形には相違が生じるものだとして、目に見える通りに描写していない絵を実物に似ていないと言って批判する人々の考え方に異を唱えました。自身の素描画について語るなかで、「ありのままに描くよりは、こうもなりうるような姿に描くことの方が好ましい」という言葉も残っています。1の『創造の信条告白』の冒頭文で宣言されていた「芸術は見えるものを再現するのではなく、見えるようにするのである」という言葉に相通じるものがあり、クレーの一貫した造形思考に触れることができる資料です。